

## 啓蒙思想期以降のヨーロッパにおける 南台湾記述と「南東台湾」の発見について

羽根 次郎

はじめに

第1節 ドマイヤの南台湾記述と康熙期漢籍史料との対応について

第2節 航海記について

第3節 『中国概説』とクラブプロートの「瑯嶠」紹介

第4節 「南部」と「南東端」

おわりに

(要約)

本稿は、南台湾とりわけ恒春半島に関する18世紀啓蒙期以降のヨーロッパでの記述について考察したものである。その結果、啓蒙時代の南台湾記述は、イエズス会宣教師ドマイヤの議論と、ストルイの有尾人発見伝承とが結合しつつ、オランウータンと人間とを連続させるための神秘主義的な牧歌的風景が広がる地域のイメージを保持してきたことが分かった。19世紀中頃に発生した漂流事件は、それゆえに強い動揺を与えることとなった。しかし、ヨーロッパの知は、東南アジアから北台湾・東台湾へと接続する人種的に混雑性の高い南台湾と、人種的には南台湾に近いものの「野蛮」という点で東台湾にも接続する「南東台湾」をカテゴリー化した。これは従来の解釈の連続性の原則を維持させるためのものであった。その結果、「南」は「混血」のイメージを保存し、「中国」たる「西」とは異なるものとして「蕃地無主論」へと接続していくこととなった。

はじめに

台湾植民地化の歴史を分析する上で重要な地域の一つに恒春半島が存在する。台湾出兵事件（1874年）だけでなく、それ以前のローバー（Rover）号事件（1867年）や、さらにはラーペント（Larpent）号事件（1851年）など、外交案件となった少なからぬ船舶遭難事故がこの地で発生した。相継ぐ海難事故のために、外国人の恒春半島への興味は1850年代にすでに存在しており、それは清朝国家権力が日本の台湾出兵事件後によりやく恒春県設置に動いたのとは対照的であった。

近代国家日本という文脈における、最初の国家規模の軍事行動といえ、この台湾出兵ということになる。明治新政府による台湾へのこの派兵の目的は表面的には、1871年に発生した琉球漂流民殺害事件の際に殺害に関与した先住民集落を攻撃することにあつた。しかし日本側が実際に企図していたのは、軍事行動終了後の台湾東部領有であつたということについては、エスキルドセンの研究によってすでに明らかにされている<sup>1</sup>。エスキルドセンによれば、日本政府の台湾東部植民地化構想の裏には、東アジアに対する西洋帝国主義の眼差しが影響していたという。またその一方で、日本自身の台湾領有論についても、江戸時代に存在した国姓爺イメージによる台湾理解の中にその萌芽を見出せることがすでに松永正義によって指摘されている<sup>2</sup>。

江戸時代の日本にすでに存在していた台湾領有企図と、西洋帝国主義による植民地主義的な台湾への眼差しという二つの文脈を接続したのは、前駐廈門アメリカ領事で、台湾出兵当時の参謀役ともなった御雇外国人ルジャンドル（Charles W. Le Gendre、1830-1899）であつた。無論、東

部領有構想をルジャンドルが全て独力で立ち上げたわけではない。西洋帝国主義の全体的な歴史的な文脈の中にこそ、台湾東部を「無主の地」と見なしたうえでその植民地化を正当化する論理をルジャンドルが構築していった過程が見出だせるはずである。この過程においてとりわけ注目したいのが、その後の台湾出兵で具体化することとして、東部全体の領有実現のために「瑯嶠」と当時称された恒春半島南端部までもが「無主の地」と解釈されていく点である。台湾東部を「化外」と見なす発想は、近代国民国家の領土観念とは異なる位相においてではあるが、清朝自身にも存在していた。しかし、台湾出兵時の攻撃対象であった恒春半島先住民集落の牡丹社や高士佛社は清朝の地方志においては、実態の如何はどうあれ「瑯嶠十八社」の一員と見なされ、「歸化生番」に属する集落として記録されていた<sup>3</sup>。だとすれば、後にルジャンドルによって「無主」と判断される台湾島南端部は、一体ヨーロッパの知の世界にいかにか把握されていったのであろうか。

たとえば、フランス人グロシエール (Jean-Baptiste Grosier, 1743-1823) が1787年に著した『中国概説 (Description Générale de la Chine)』初版<sup>4</sup>は全4巻よりなるが、その構成は第1巻より順に、「中国の15省の解説 (DESCRIPTION DES QUINZE-PROVINCES DE LA CHINE)」、「中国のタタール地方について (DE LA TARTARIE CHINOISE)」、「中国の朝貢国 (ETATS TRIBUTAIRES DE LA CHINE)」、「中国の自然史 (HISTOIRE NATURELLE DE LA CHINE)」となっている。このうち「15省」の内訳について紹介すると、北直隸、江南、江西、福建、浙江、湖広 (のちの湖北・湖南)、河南、山東、山西、陝西、広東、広西、雲南、貴州の諸省が挙げられている。それでは台湾は「福建」の説明の中にも含まれているのかと言えば、そうではない。その実、台湾については、第2巻「中国のタタール地方について (DE LA TARTARIE CHINOISE)」において、「東部中国のタタール地方 (Tartarie Chinoise orientale)」、「西部中国のタタール地方 (Tatarie Chinoise occidentale)」、「中国に従属する他の人々 (Autres Peuples soumis à la domination Chinoise)」と三分類されている章のうちの第三の「中国に従属する他の人々」の中に、「台湾島、すなわちフォルモサ (L'île de Taï-ouan, ou Formose)」という節が設けられている。つまり、「中国の15省」にではなく、「タタール人」によって拡大された版図に所属する地域として台湾は分類されてしまったわけである。

啓蒙思想が主流であった18世紀のフランスで始まる、「中国 (Chine)」を全体的に把握しようとする記述は、「中国」の「内地」ではなく、「タタール」が拡大させた「外地」として台湾を把握しようとし、その試みは、19世紀に至っても一貫して継続した。本論では、そうした啓蒙思想の時代にまで遡ることによって、台湾南端が欧米圏において認識されていく歴史的な文脈を明らかにすることを意図している。

使用史料であるが、啓蒙思想期の文献としては主にフランス語による中国概説書からの引用を行い、補助的に英語文献をも参照した。そして、英米両国が当事国となった19世紀中葉以降の漂流者の問題に関しては、英語文献を用いることとなった。こうした分野の研究には従来、注意が十分には注がれてこなかったため、台湾に対する列強の領有企図という点、ルジャンドルの「活躍」が一種の武勇伝のように語られてきた。本稿はそうした語りを乗り越えて、台湾南端部とい

う一地方の歴史を、ヨーロッパでの議論を参照することで、より大きな歴史の文脈の中に置いて捉え直そうという問題認識にも支えられていることを明記しておく。

なお、引用部分の〔 〕と（ ）で表される括弧はそれぞれ筆者注と本文中の割注を表す。また、引用部分の傍点は全て筆者が加えたものである。

## 第1節 ドマイヤの南台湾記述と康熙期漢籍史料との対応について

ヨーロッパの南台湾イメージを論じるに当たっては、康熙帝に師事し北京に没したイエズス会宣教師ドマイヤ（Joseph-Anne-Marie de Moyriac de Mailla、漢名：馮秉正、1669-1748）の名を挙げぬわけにはいかない。1720年にパリで出版されたイエズス会士の書簡集『イエズス会宣教師による外国伝道に関する教訓的かつ興味深き書簡集〔通称イエズス会士書簡集〕』という出版物の中にドマイヤの書簡が掲載されているが<sup>5</sup>、康熙帝の命を受け前年まで台湾地図作成に従事していた所以であろうか、数十頁にも渡り台湾を詳細に論じている。

ドマイヤは、ほかにイエズス会のフランス人宣教師レジ（Jean-Baptiste Régis、1663（1664?）-1738）、そして同会ドイツ人宣教師ヒンデラー（Roman Hinderer、1668-1744）とともに台湾に行ったが、この二人が台湾北部に向かったのに対し、ドマイヤのみは南部に向かった<sup>6</sup>。したがって、ドマイヤの記述には南台湾への言及が少なくない。ドマイヤによれば、台湾島は、北は「雞籠寨」（Ki-long-tchai）から南は「沙馬磯頭」（Xa-ma-ki-teou）、すなわち恒春半島南端<sup>7</sup>へと向かう山脈によって東西に二分されると述べられている<sup>8</sup>。そして、「中国人に服従したフォルモスの人々」（Les peuples de Formose qui se sont soumis aux Chinois）は「45のシェ」（Ché、社）と呼ばれる村落あるいは家屋群に分けられ、北部には36の、南部には9の「シェ」が存在する<sup>9</sup>。この南部9村落について、本来12の「シェ」が南部に存在したが、うち3集落が反乱を起こし、中央山脈の東部へ移動してしまった結果であるとドマイヤは論じる<sup>10</sup>。

さらに、ドマイヤは「北部の村落」については、「人口が十分に多く、その家屋は中国人の家屋に酷似している。<sup>11</sup>」と記述したのと対照的に、南部については、「泥なり竹なりでできた藁葺き屋根の粗末な小屋の山しかない。<sup>12</sup>」とし、「これらの小屋の中には、椅子もベンチもテーブルもベッドもなく、家具の一切が存在しない<sup>13</sup>」ことなどを次々に挙げ、台湾島内における南北間での中国大陆文化の影響の差異を指摘する。ドマイヤによる南部住民の野蛮性強調はまた食習慣にも及び、「食事は大変不衛生である。彼らには盛り皿〔dish〕も、取り皿も、ボールも無ければ、スプーンも、フォークも、箸も無い。食事のために準備したものは、板か筵の上に置かれる。そして、指でそれを食べるのだ。それはまるで猿のようである。<sup>14</sup>」との記述が存在する。さらに、半焼けの肉を食べること、さらにベッドは木の葉で出来ているとか、弓矢の扱いが優れているとか、ドマイヤの列挙は枚挙に暇がない。

以上のようなドマイヤの記述は、当時のヨーロッパ人の南台湾記述に非常に大きな影響を与えることとなる。まず、1721年発行の雑誌『科学と芸術の歴史に関する報告（Memoires pour l'Histoire, des Sciences et des Beaux Arts）』において、現地住民の集落45社のうち、北部には

36社、南部には9社の集落が存在するというドマイヤの記述が引用された<sup>15</sup>。また1736年にハーグで出版されたイエズス会宣教師デュアルド (Jean-Baptiste Du Halde、漢名：杜赫德、1674-1743) の『中華帝国及び中国領韃靼における地理学・歴史学・年代学・政策学の記述 (Description Géographique, Historique, Chronologique, Politique, et Phisique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise)』<sup>16</sup>や、1748年にパリで出版された『航海通史 (Histoire Générale des Voyages)』<sup>17</sup>においても、この南部9村落のことだけでなく、南部住民の未開性強調についてもドマイヤの書簡がほぼ転載され、その認識を踏襲した。フランスだけでなく、イギリスでも1741年、デュアルドの上記著作の英訳版「The General History of China」の第3版が出版され、そのとき、この台湾に関する記事の英訳が初めて掲載された<sup>18</sup>。これで、英語文献でも南台湾に関するドマイヤの記述に触れることができるようになったのである。

ところでドマイヤの南台湾記述は、自ら台湾島内陸部に入って行った形跡がない以上、付近での聞き取りと、参照した文献によるものであると思われる。それでは如何なる文献を参照したのだろうか。いま、ドマイヤの書簡の日付が1715年であることを考慮すると、蔣毓英『臺灣府志』(1685 (康熙二十四))、高拱乾『臺灣府志』(1695 (康熙三十四))、郁永河『裨海紀遊』(1697 (康熙三十六) 頃)、陳第「東番記」(1603 (明・萬曆三十一))、以上の四文献あたりを参照したことになる。

「中国人に服従したフォルモサの人々」というのは「土番」なり「歸化生番」なり「熟番」なりを指していると思われる。それらの集落をドマイヤは45社に区分したことになるが、そのうち北部の36社については、蘭陽平原 (宜蘭県) に存在したという「蛤仔灘三十六社」の記述を明らかに参照している。以下の【表1】を見てみたい。

【表1】康熙期文献中の「蛤仔灘三十六社」

年代	出典	内容
1685 (康熙二十四)	蔣毓英『臺灣府志』 卷之二 叙山、諸羅縣山	…山朝山有り。(雞籠鼻頭山東南ニ在り、土番山朝社有り、其ノ南即チ蛤仔灘三十六社ナリ。) <sup>19</sup>
1695 (康熙三十四)	高拱乾『臺灣府志』 卷之一 封域、山川、諸羅縣山	…山朝山有り。(雞籠鼻頭山東南ニ在り、土番山朝社有り。其ノ南即チ蛤仔灘三十六社ナリ。) <sup>20</sup>
1697 (康熙三十六)	郁永河『裨海紀遊』 卷上	蛤仔灘 (音葛雅蘭) 等三十六社ハ野番ニ非ズト雖モ、貢賦ヲ輸セズ、悉クハ載スルニ難シ。 <sup>21</sup>

参照：詹素娟「賤社、地域與平埔社群の成立」、『臺大文史哲學報』第59期、2003年11月、第135頁。  
なお、蔣毓英『臺灣府志』と高拱乾『臺灣府志』の引用は『臺灣府志三種』(中華書局(北京)、1985年)より、『裨海紀遊』の引用は臺灣銀行經濟研究室版(1957年)より行う。以下これに倣う。

次に、南部の9社及び反乱を起こしたという3社についてであるが、関連する記述は存在しない。ただ、康熙年間における鳳山県はまだ屏東平原が開拓の緒に就いたばかりであり<sup>22</sup>、清朝官

人の視界に恒春半島最南端の瑯嶠まで入っていたか考えると大いに疑問である。同平原で南下中の“開拓前線”の彼岸に見えた「社」、という文脈で考えると、これは「鳳山八社」を踏まえたものなのではなかろうか。【表2】はこれについてまとめたものである。

【表2】康熙期文献中の「鳳山八社」

年代	出典	内容
1685 (康熙二十四)	蔣毓英『臺灣府志』 卷之四 物産、稻之屬	米秬（鳳山八社土民園二種エ、米獨り大ナリ） <sup>23</sup>
	卷之五 風俗、土番風俗	鳳山之下淡水等八社、禽獸ヲ捕ヘズ、専ラ耕種スルヲ以テ務メト爲シ、丁ヲ計リ米ヲ官ニ輸ス。 <sup>24</sup>
	卷之七 賦税、田賦、臺灣府	偽時、鳳山縣屬下淡水等八社土番男婦ノ丁口米共計五千九百三十三石八鬥ヲ征ス。 <sup>25</sup>
1695 (康熙三十四)	高拱乾『臺灣府志』 卷五賦役志 總論	諸羅三十四社土番ノ如キハ鹿ヲ捕ヘ生ヲ爲シ、鳳山八社土番ハ地ニ種エ口ニ鋤スルニ、偽鄭、捕鹿各社ヲシテ有力者ヲ以テ經管セシメ、名ヅケテ贖社ト曰フ。……其レ鳳邑八社ノ丁米ハ、教冊壯少諸番、宜シク一例ニ米一石ヲ征スルヲ通行サスベキニ似タリ。 <sup>26</sup>
	卷七風土志 土産、稻之屬	禾秬（鳳山八社土民園二種エ、米獨り大ナリ） <sup>27</sup>
1697 (康熙三十六)	郁永河『裨海紀遊』 卷上	鳳山縣ハ、其〔台湾島〕ノ南ニ居シ、臺灣縣ヨリ界ヲ分ケテ南シ、沙馬磯ノ大海ニ至ル。袤四百九十五里ナリ。海岸ヨリ東シ、山下打狗仔港ニ至ル、廣五十里ナリ。土番十一社ヲ攝〔と〕ルニ曰ク、 <u>上淡水</u> 、 <u>下淡水</u> 、 <u>力力</u> 、 <u>茄藤</u> 、 <u>放索</u> 、 <u>大澤磯</u> 、 <u>啞猴</u> 、 <u>答樓</u> 、 <u>以上平地八社</u> 、 <u>輸賦應徭</u> スト。曰ク茄洛堂、浪嶠、卑馬南三社ハ山中ニ在リ、惟ダ輸賦スルノミニシテ、徭ニ應ゼズト。另ニ <u>傀儡番</u> 並ビニ山中野番有リ、皆社名無シ。 <sup>28</sup>

著者作成。

上に挙げた二つの表のうち、目を引くのは郁永河『裨海紀遊』の記述内容である。その具体性もさることながら、ドマイヤの記述との類似性が、二つの「臺灣府志」以上に高い。なかでも、ドマイヤが南部の集落を9社とした原因について、「土番11社」の他に「傀儡番」を一社として考えていたゆえではないかと解釈すると、未帰順の3社の記述の問題も含めて、辻褄は全て合うことになる。

ただ、ドマイヤが『裨海紀遊』のみを参照していたのかということ、そうではない。ドマイヤによる南台湾住民の生活環境についての記述と類似した文章を集めてみると、以下の【表3】のようになる。

【表3】康熙期文献中の生活環境記述

年代	出典		内容
1603 (明萬曆三十一)	陳第 『東番記』		地ニ竹多ク、大ナルコト數拱ニシテ、長キコト十丈ナリ。竹ヲ伐リ屋ヲ構へ、茨クニ茅ヲ以テス。廣長數雉ナリ。 <sup>29</sup>
			器ニ床有リテ、案几クモ無ク、地ニ席シテ坐ス。 <sup>30</sup>
1685 (康熙二十四)	蔣毓英 『臺灣府志』	卷之五 風俗 土番風俗	南番尤モ北番ヨリ窮ス、……。 <sup>31</sup>
			飯ハ糯米ヲ以テ之ヲ爲リ、熟スレバ則チ各手ヲ以テ捏團シテ食フ、……。 <sup>32</sup>
			用フル所ノ標槍、長サ五尺許リ、物ヲ百歩ノ内ニ取レバ、發シテ中〔あた〕ラザル無シ。 <sup>33</sup>
			竹木ノ類、手ニ隨ヒ砍斷スルコト工匠ヨリ捷ク、編籬造屋俄頃成ルベシ。 <sup>34</sup>
1695 (康熙三十四)	高拱乾 『臺灣府志』	卷七 風土志 土番風俗	再ビ深山ノ中ニ入ル、人狀猿猴ノ如クシテ、長サ三尺ニ滿タズ、人ニ見〔まみ〕エレバ則チ樹杪〔じゅべう〕ニ升〔のぼ〕ル。 <sup>35</sup>
1697 (康熙三十六)	郁永河 『裨海紀遊』	裨海紀遊 卷下	室中空ニシテ所有無ク、幾犬有ルヲ視タリ。 <sup>36</sup>
			山中ニ麋鹿多ク、射得スレバ輒チ其ノ血ヲ飲ム。肉ノ生熟甚ダシクハ較ベズ、腹ヲ果〔み〕タス而已。 <sup>37</sup>

著者作成。「東番記」の引用は沈有容『閩海贈言』（臺灣銀行經濟研究室（臺北）、1959年）より行う。

表中の文章は、全体を通して、ドマイヤが記した内容と類似しているところが少なくなく、ドマイヤはこれらの文章を明らかに参考にしている。しかしその実、「南番尤モ北番ヨリ窮ス」以外の記述は全て、南台湾ではなく台湾全般の先住民を説明したものに過ぎない。ドマイヤはそれを南台湾の特徴とした。そしてその一方で、北台湾については、家屋が中国式であると紹介するのである。つまり、ドマイヤは「南番尤モ北番ヨリ窮ス」のイメージに沿う形で、清朝官人が描写した台湾先住民全体のイメージを南台湾の先住民にのみ被せていったのである。そうだとすれば、北部と南部の先住民の中に文明度における差異を敢えて求める必要がどこにあったのか。それを考えるには、当時のヨーロッパ全体における「人種」への眼差しについて検討する必要がある。次節ではこの問題について論じてみたい。

## 第2節 航海記について

ところで、宣教師の文章以外で台湾について言及したものとしては、航海記についても留意する必要がある。なかでも南台湾認識に影響を与えた航海記として、『ジャン＝ストルイ航海記 (Les Voyages de Jean Struys)』は非常に重要である。この中では南部台湾住民との遭遇の経験が描写されている。そして、管見による限りでも、1681年アムステルダム版<sup>38</sup>、1682年リヨン版<sup>39</sup>、1720年アムステルダム再版<sup>40</sup>、1730年アムステルダム再々版<sup>41</sup>と度々上梓の機会に恵まれ、以下に論じるように、ヨーロッパの南台湾認識に甚大な影響を与えた。

まず、その記述内容について紹介しよう。ストルイは文中において、自身が遭遇した台湾島南部の男性住民について以下のように観察している。

彼の尾は脚よりも長く、赤毛で覆われており、牛の尾とよく似ていた。……彼が言うには、この島の南部の人間は全て尾を持っており、この畸形部は気候によるものであるということであった。<sup>42</sup>

台湾島南部の有尾人伝承については、このストルイを除き、他のいかなる航海記や地誌にも言及されたことが無く、その真偽は当時から懐疑的に見られていた<sup>43</sup>。1727年にフランスのルーエ (Rouen) で出版された『航海の実用性並びに学術における古代研究の利点 (De l'utilité des voyages et de l'avantage que la recherche des antiquitez procure aux sçavans)』でも、「ストルイがフォルモサ島について報告したことは、やや奇妙なものであった」と断りを入れた後で有尾人について紹介している<sup>44</sup>。

しかし当時のヨーロッパでは、地球上のどこかに有尾人が存在するのではないか、という人種学的あるいは博物学的興味は大変高かった<sup>45</sup>。そして、有尾人の存在を議論するとき、ストルイの文章はその内容を支持するかどうかに関係なく、無視すべからざる資料であった。博物学の大家ビュッフオン (Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-1788) が有尾人につき論述した際も、「ストルイがフォルモサ島について述べたことが全面的に信用しうるかどうか私は知らない」と述べつつも、それでもやはりストルイの記述について詳細に言及している。こうした例からも、当時の有尾人論争におけるその重要性が伺えるのである<sup>46</sup>。

以上のように、有尾人存在の根拠の一つとしてストルイの文章が提示されるのが一般的であったのは、当時の人種学の潮流と深い関係がある。ここで、同時代における「有尾人」概念の位置を確認するために、1768年出版のロビネ (J. B. Robinet, 1735-1820) 『人間の形態の性質における漸次的変化に関する哲学的考察、あるいは人間を作る自然界に関するエッセイ (Considérations philosophiques de la gradation naturelle des formes de l'être ou les essais de la nature qui apprend à faire l'homme)<sup>47</sup>』を挙げる。

本書はその題名にあるように、人種の分類の問題を人類史の見地から議論している。この中に、「人間、そして様々な人種について (De l'Homme & des Différentes races humaines)」と題

する章があり、世界の人種が十四種に分類されているのだが、その十四種に分類された「人種」の一つに、「有尾人 (Les Hommes à queue)」という範疇が設定されているのである。そしてストルイの記述も他の東南アジアの有尾人記述と共に、ここで目にすることができるのである<sup>48</sup>。著者はストルイの記述を全面的に引用した後、南台湾の「有尾人」の尾について、「マニラの黒人や、ミンドロ、ランブリの住民などが持つ尾とは、形や大きさが非常に異なる。<sup>49</sup>」と述べる。南台湾の「有尾人」を、東南アジアの「有尾人」との連続性において理解し、両者を比較するのは、当時の人種学文献では頻繁に見られる。

「有尾人」を「人間」に含めたことと、「有尾人」が東南アジアを中心に分布していると構想したこととの間には実は関連がある。それを確認するために、当時のヨーロッパの思想的背景についてまず整理しておきたい。18世紀当時ヨーロッパでは、事物の存在を、ギリシア哲学以降の伝統である「存在の連鎖」の中で、事物の漸次的変化によるものと認識し、さらにそうした漸次的変化の総合が結果的にもたらすことになる円環構造の中でそれを認識することを重視していた<sup>50</sup>。アリストテレスは『動物学』第8巻第1章に言う。

このように自然界は無生物から動物にいたるまでわずかずつ移り変わって行くので、この連続性の故に両者の境界もはっきりしないし、両者の中間のものがそのどちらに属するのかわからなくなる。<sup>51</sup>

ルネサンス期に再評価された古代ギリシアの「存在の連鎖」概念に近代的な合理的経験主義が合流していくという潮流の中で、18世紀ヨーロッパでは、人間と動物はその境界が本来曖昧であると考えられるようになっていた。ルソーは『人間不平等起源論』の中で、旅行者たちが「けだもの」と従来考えてきた人間に似た動物は、実は動物ではなく野蛮人なのではないかと疑い、以下のように述べる。

……すなわちよく調査をしなかったか、あるいは外形にいくつかの相違が認められたか、あるいは単にものを言わなかったという理由のために、旅行者たちがけだものだと思っているあの人間に似たさまざまな動物は、ほんとうは真の未開人なのではないだろうか。そしてその人種は太古に森の中に散って、自分の潜在能力をどれも発達させる機会がなく、いかなる程度の完成をも得ることがなく、いまなお自然の原始状態にいるのではないだろうか、……<sup>52</sup>

こうした議論を踏まえてルソーは、オランウータンのような大型類人猿について、「これらのいわゆる怪物の描写には、人類との目立った一致が見いだされ、相違のほうは人間と人間とのあいだに指摘できるものよりも小さいのである。」と述べ、動物と人間とを絶対に対立する存在と見なそうとはしない。その相違を分かち理性の強弱は相対的なものでしかなく、オランウータンは理性を強化する言語さえ使用できるようになれば、完全な人類になれるとされた<sup>53</sup>。そして重



要なのは、東南アジアこそ、このオランウータンの棲息地であったということである。それゆえに、オランウータンと人間との「存在の連鎖」を担保する中間者的存在としての「有尾人」が、東南アジアに存在する必要があったのである。

また、人類という語の定義に強い興味が注がれていた以上、有尾人は人種学だけでなく言語学でも取り上げられた。たとえば、進化論的な歴史言語学で名を馳せた言語学者バーネット（James Burnett Monboddo, 1714-1799）はその著『言語の起源と発展について（Of the Origin and Progress of Language）』（1774）で有尾人の存在に言及した。そして、その根拠としてやはり、ボルネオ、マニラなどでの遭遇談と並び、ストルイの記述を提示したのである<sup>54</sup>。

ストルイの記述には、その真偽に対する懐疑的な観点が当初より存在した。しかし、それは同時代の学術潮流に呼応するものでもあった。そのため、台湾で有尾人を見たという第二の発見者が現れないにも関わらず、この文章が引用され続けたのである。これは類人猿から人類へと連続的に変化する過渡地点、つまりは「野蛮」から「文明」への過渡地点という南台湾イメージを決定づけることにもなった。

なお、台湾南部に触れた航海記は他にも若干存在する。たとえば1726年にロンドンで出版された『大南海経由の世界周航（A Voyage round the World by the Way of the Great South Sea）』には、作者シェルボック（George Shelvocke, 1675-1742）らが、グアム島から紅頭嶼（Bottal Tobacco Xima）を経て台湾島南端部を回航中、現地住民の射撃を受けたという記述がある<sup>55</sup>。しかしその後この記述について言及したり引用したりする者は多くなかった。次いで1745年にはアンソン「南海への航海記（A Voyage to the South Seas）」の中にも台湾南端の語が現れる<sup>56</sup>。この書の内容については当時より関心の高かったことが、「スコツマガジン（The Scots Magazine）<sup>57</sup>」や「航海、発見、旅行の新しいコレクション（A new collection of voyages, discoveries and travels）<sup>58</sup>」にも転載されていることから伺えるが、ただ台湾南端の記事に限定して考えると、北マリアナ諸島のテナン島から廈門に向かう通過点として扱われているに過ぎず<sup>59</sup>、ストルイが与えた影響とは比ぶべくもない。また、「ベニョフスキー伯爵航海記（Memoirs and Travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky）」が1790年に出版されたが<sup>60</sup>、これも東台湾が舞台であったこともあってか、以後の南台湾記述に影響を与えることはほとんど無かった。またこれには、後述するように、その出版が「中国概説」の出版（1785年）に間に合わなかったこととも関係があるものと思われる。

### 第3節 『中国概説』とクラブロートの「瑯嶠」紹介

1777年から1785年にかけて革命前夜のパリで、ドマイヤ『中国通史（Histoire Générale de la Chine）』全13巻が出版される<sup>61</sup>。最終巻である第13巻には本書の出版に尽力したグロシエールの補足が加わった<sup>62</sup>。グロシエールの補足箇所は、『中国概説（Description Générale de la Chine）』の名で1785年にパリで改めて出版された<sup>63</sup>。これによって、ドマイヤによる未開性の記述とストルイによる「有尾人」の記述とが一冊の書籍の中に初めて同居することになった。また、「中国

概説」は翌1788年にはロンドンで<sup>64</sup>、ついで1795年には北アメリカ大陸のフィラデルフィアで<sup>65</sup>、それぞれ英訳が出版され、『中国通史』も、パリでの出版と同年の1777年にはイタリア語訳がシエナで出版された<sup>66</sup>。

これら2冊の普及によって、18世紀の段階における南台湾のイメージ形成は終了したと考えることができる。つまり、北部に比べて未開化であること、そしてそれを表すかのように他の東南アジア諸地域と同様に「有尾人」が存在するということである。1796年版『エンサイクロペディア=ブリタニカ (Encyclopædia Britannica)』の「Formosa」欄を試みに参照すると、グロシエールの英訳版にある南台湾記述が転載されていることにすぐ気づける<sup>67</sup>。つまり、この時期にはすでに、上記の南台湾のイメージがヨーロッパ人に安定的に存在していたわけである。こうした南台湾認識はその後、博物学文献や中国解説書などでしばらく再生産されていく。

その後の南台湾記述に新たな情報を付け加えたのは、ドイツ人東洋学者クラプロート (Julius Klapproth、1783-1835) が1824年に出版した『アジアに関するメモ：東洋の人民に関する歴史的地理学的言語学的研究』(Mémoires relatifs à l'Asie: Contenant des Recherches Historiques, Géographiques et Philologiques sur les Peuples de l'Orient) である<sup>68</sup>。クラプロートは、ベルリン生まれのドイツ人であったが、当時世界の東洋学の中心的位置を占めていたパリアジア協会 (La Société Asiatique de Paris) において、評議会委員を務めていた。フランス語で書かれパリで出版された本書のなかで、クラプロートは初めて「瑯嶠」の名を紹介した。クラプロートの文章は以下のようになっている。

フォルモサ最南端の“Cha ma ky theou”〔沙馬磯頭〕の南方に、“Lang Khiao”〔瑯嶠〕という島があり、引き潮であれば容易にそこに上陸できる。そこには土着民〔les indigènes〕が居住している。彼らは羊を多数飼育している。外来者にとってその空気はひどく有害であると言われている。中国人〔les Chinois〕はそこに出没する悪魔と有害な霊を非常に恐れている。<sup>69</sup>

瑯嶠を島と認識していることをはじめ、牧羊や靈魂の記載など、事実誤認や神秘主義的な眼差しをこの引用から感じざるを得ないが、ここでは以下の二点について特に注目したい。一つは権威ある東洋学者としてのクラプロートの国際的影響力、もう一つは、クラプロートが、グロシエールの記述を引用せずに、新たに台湾について論じたことである。二人の間には書簡を交換しうる交友関係があり<sup>70</sup>、またクラプロートがときにグロシエールの文章の存在に言及していることからして<sup>71</sup>、これはクラプロートが意図的に引用しなかったものであると思われる。

本文全33頁と、「フォルモサの語彙 (Vocabulaire Formosan)」と題する付録全21頁の合計54頁を書き下ろしたクラプロートの台湾記述は<sup>72</sup>、その章の名にあるように(「中国の書籍の抜粋 (Extrait de Livres Chinois)」)、清朝知識人の旅行記か地方志を翻訳したものであった。このうち台湾を扱った章のみが英訳され、パリでの出版と同年の1824年、「The Asiatic Journal and Monthly Register」誌上に、「フォルモサ島簡略 (A Concise Account of the Island of Formosa)」

と題してロンドンで発表された<sup>73</sup>。瑯嶠の個所もこのときはほぼ全訳されており、関心が決して低くはなかったことが伺える。さらに、クラブプロートの原文の発表から5年後、地理学協会編集の『世界地名辞典（Dictionnaire géographique universel）』新版第6巻がブリュッセルとハーグで出版された際、“LANG-KHIAO”（瑯嶠）の語が以下のように加わるようになった。

瑯嶠：フォルモサ島と中国との間のフォルモサ海峡中にある澎湖諸島の島。瑯嶠に上陸するのは容易である。住民は羊を多数飼育している。外来者にとってその空気はひどく有害であると言われている。現地には有害な霊が存在すると中国人は主張しており、上陸することを恐れている。<sup>74</sup>

『アジアに関するメモ』ではフォルモサ南端のさらに南方にあるとされていた瑯嶠島が、この辞典では澎湖諸島の一つに数えているのは、執筆者名簿に自らの名を連ねていることからして、クラブプロート本人に他ならない。グロシエールの台湾記述を引き継がないことを意図的に選択したクラブプロートではあったが、結局のところ、この引用にも見えるように、南台湾をヨーロッパとは異質の空間として把握しようという従来の視線が、自らの瑯嶠記述の中でも反復されてしまう結果となった。

一体、クラブプロートはいかなる文章を参照したのであろうか。瑯嶠が当初、沙馬磯頭の南方に浮かぶ島であると考えたのは蔣毓英『臺灣府志』の内容の影響であると考えられる。鳳山県の山川の紹介において以下のような記述が存在する。

治ノ東、其ノ山ノ最モ聳ユル者、曰ク傀儡山……、曰ク卑南覓山……。轉ジテ南シ復タ折レテ西南スレバ、迭巒てつらんふくしう複岫、山ニ非ザル莫キナリ。更ニ轉ジテ西ノカタ海ニ出ヅレバ、郎嬌山ナリ（沙馬磯頭山ノ東南ニ在リ。府治ヲ離ルルコト五百三十餘里ナリ。）、沙馬磯頭山ナリ（郎嬌山ノ西北ニ在リ。其ノ山西、海ニ臨ミ、山頂常ニ雲ヲ帯ブ。人之レヲ視ルニ、人形雲中ニ往來スル有ルガ若クナレバ、疑ヒテ仙人其ノ上ニ降游シタルカト爲ス。府治ヲ離ルルコト五百三十里ナリ。）、而シテ山始メテ盡ク。皆鳳山ノ佐輔ナリ。<sup>75</sup>

これは蔣毓英のみならず、高拱乾『臺灣府志』（1695）と周元文『重修臺灣府志』（1718）でも上記の説明が転用されている。台湾現地の官人は恒春半島からさらに東南の海上、つまりバシー海峡に「郎嬌山」なる山が存在すると認識していた。「五百三十里」と「五百三十餘里」という距離表示を考えれば、これは七星岩のこととも思われるが、牧羊しうる面積を七星岩は持たない。実は乾隆「大清一統志」にも「琅嶠山」に関する記述が存在する。

沙馬磯頭ヨリ一潮水ニシテ至ルベシ。遠視微茫トシテ、舟人まね罕ニ至ルノミナレバ、土番ノ居スル所トナル。地羊ニ宜シ。下淡水ヲ去ルコト三百餘里、瘴氣多シ。<sup>76</sup>

これこそ、クラブロートの記述内容と酷似したものであり、クラブロートの言う「Livres Chinois」(中国の書籍)とは恐らくこの乾隆『大清一統志』を主に指している。ただ、「中国人」が上陸を恐れているという内容については、康熙・乾隆・嘉慶の三つの『大清一統志』にもなければ、蔣毓英・高拱乾・周元文・范鹹らのあらゆる『臺灣府志』にもない。これについては、陳文達『鳳山縣志』(1720年)に以下の記述が見える。

鳳山溪ヨリ南ノカタ淡水等ノ處ニ至ルニ、早ケレバ則チ東風大イニ作り、晡ニ及バ鬱蒸トシ、夜ニ入レバ寒涼トス。冬朔風少ナク、綿ヲ装スルヲ用ヒズ。土ニ瘴氣多ク、來往ノ人恒ニ疾病ヲ以テ憂ヒト爲ス。<sup>77</sup>

クラブロートは「瘴氣」を「有害な靈 (les génies malsesans)」と言わば直訳してしまっており、それがマラリアであることに気がついていない。このような翻訳の中にも、既に指摘したように、南台湾を空間的に現世とは異質のものとしてさせようとするヨーロッパの南台湾認識が見て取れるのである。それは、ヨーロッパの当時の東台湾記述にありふれていた先住民の野蛮性(あるいはそれと表裏の関係にある素朴さ)の強調でもなければ、西台湾記述におけるような「中国」の支配下にあるがゆえの文明性(あるいはそれと表裏の関係にある狡猾さ)の強調でもない。一言で言えば、リアリティに乏しい空想的な空間として、南台湾はヨーロッパの知の体系の中に定位されたのである。

#### 第4節 「南部」<sup>the southern point</sup>と「南東端」<sup>the southeast end</sup>

##### (1) ロビネットの空間区分

以上論じてきたように、南台湾に関する情報は欧文文献の中では断片的かつ空想的なものでなかった。実は、有尾人はすでに、18世紀後半の権威ある博物学者であったブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840) やグメリン (Johann Friedrich Gmelin, 1748-1804) によって否定されていた<sup>78</sup>。しかし、そうした情報は、ヨーロッパにおける東/東南アジアへの空間認識の中で、現実から遊離しつつも一定の眼差しに沿って整理され、言説の再生産を重ねた。なかでも盛んに引用されたのがストルイの有尾人記述であった。たとえば、1830年にベルギーのモン (Mons) で出版された『汎神論、すなわち全ての宗教の起源 (Le Panthéisme, ou l'origine de toutes les religions)』においても、ストルイをはじめ、フィリピンミンドロ島のマンガアン (Manghian) などの有尾人の記述を参照しながら、オランウータンについて以下のようなコメントがある。

もしも、ポンゴ [オランウータン] が話さない人間であるのならば、ミンドロ島のマンガアンとフォルモサ島南部の住民は話す猿である。それゆえに、まさにこここそが、人類の起源を賢人が探し求めるべき場所なのである。<sup>79</sup>

一方、1830年代になると、広州在住の欧米人が雑誌を発行するようになる。その代表が1832年創刊の『The Chinese Repository』である<sup>80</sup>。この雑誌は、スティーブンス（Edwin Stevens）「フォルモサ」<sup>81</sup>や藍鼎元『鹿州文集』の一部翻訳<sup>82</sup>を掲載するなど、台湾関連の情報の普及に努めた。しかし、多方面にわたる台湾概況の啓蒙とは裏腹に、南台湾住民に関する新たな情報が付け加えられることはほとんどなかった。

そうしたなか、南台湾認識の刷新の必要性を促す事件が発生する。

1851年5月、台湾南端沖合を航行中のイギリス砲艦アンテロープ（Antelope）号が、追手の銃声を背に聞きながら小船に乗って沖合いに逃げてきたイギリス人3名を救助したのである。この3名は、1850年に上海に向けリバプールを出航後行方不明になっていたラーペント（Larpent）号の乗組員であった<sup>83</sup>。上海に護送された3名は時の駐上海イギリス領事オルコックより事情聴取を受ける。その結果、アンテロープ号乗組員30余名は、最終的に救助された3名を残して、2箇所の上陸地点で全員強奪殺害されていたことが判明する<sup>84</sup>。

ラーペント号船員3名救出のニュースは在華欧米人に相当な衝撃を与えた。まずイギリス海軍船サラマンダー号（Salamander）が事件現場に急行し、行方不明者の調査を行う<sup>85</sup>。次いでハリール＝パークスが1851年、新たな情報を求めて台湾島を訪問する<sup>86</sup>。しかしながら、いずれも具体的な成果がないまま捜査は終了してしまう。そのため、同様の調査を従来予定していたアメリカも調査を取りやめることとなった<sup>87</sup>。

当時台湾海域では、1848年にイギリスのアヘン輸送船ケルピー号（Kelpie）が、翌1849年にサラ＝トロットマン号（Sarah Trotman）がそれぞれ姿を消しており<sup>88</sup>、度重なる遭難事故に対して、台湾島に漂着しているとの噂は絶えなかった<sup>89</sup>。ラーペラント号生存者救助の情報は、かかる噂が現実味を帯びていることを示していた。ゆえにこれ以後、香港を中心に南台湾先住民理解に関する議論が俄かに活気づいてくる。1857年3月、香港在住のアメリカ人商人ロビネット（William M. Robinet）が、調査船パール号（the Pearl）を派遣して行った調査の結果として、駐清アメリカ代理公使パーカー（Peter Parker）に以下の報告を行う。

フォルモサの人口は四つに分類される。すなわち、島の西側に居住する中国人、東部と中央部を占領する先住民、南東端の一地点を占拠する若干の食人種、そして南部及びその東西周辺部に居住するカリス〔Kalis〕である。<sup>90</sup>

中央山脈を境として「東」「西」にそれぞれ、「先住民」「中国人」をあてがう台湾認識はすでにドマイヤの時期に確立しており、驚くことではない。驚くべきは、ロビネットがそこに「南」と「南東」を加えていることである。さらに、「南」の「カリス」については温厚な語調を用いているのに対して、「南東」については「占拠する若干の食人種」と実に物騒な表現を選んでいる。無害の「南」に凶暴な「南東」というイメージの組み合わせのなかにロビネットの南台湾への眼差しは定位されている。これはどういうことなのか。

## (2) 「南」への眼差しと「混血」について

まず「南」の「カリス」についてだが、これは黄叙璣『臺海使槎録』において「瑯嶠十八社」や「鳳山番」と区別された先住民集落群としての「傀儡番」の「傀儡」の音訳であるのは疑いなく、当時ロビネットは既に「傀儡」の名を知っていたことになる。

そこで「傀儡番」の語の本来的イメージをまず確認しておきたい。高拱乾『臺灣府志』(1695年)に「臺灣吟」という吟がある。内容に矛盾が無いことからして、『臺海使槎録』を雛形に詠まれたものと考えられるこの「臺灣吟」は、高拱乾『臺灣府志』のみならず、周元文『重修臺灣府志』(1718年)や劉良璧『重修福建臺灣府志』(1742年)、陳文達『鳳山縣志』(1720年)、王瑛曾『重修鳳山縣志』(1764年)にも度々記載されており、当時の清朝官人にとっての「傀儡番」への印象を理解するには有用である。

山深深タル處 <sup>ところ</sup> 又タ深山	一種名ヅケテ傀儡番ト爲スアリ
険ヲ負ヒ人ヲ殺シ任俠ヲ誇リ	終年芋ヲ煨キ兒孫ヲ飽カシム
烟霞骨ヲ鑄レバ身能ク壽ニシテ	薜荔衣ト爲レバ冬モ亦タ温ナリ
鳥道天ニ倚リ高キコト極マラス	慣常奔走シ捷キコト猿ノ如シ <sup>91</sup>

「深山」「険ヲ負ヒ」「烟霞」「鳥道天ニ倚リ」「薜荔」といった語の連なりは、深山幽谷たる異質の空間の印象を読む者に与える。本来生活の障害となるべき「烟霞」「薜荔」は、「傀儡番」にとり逆に体力を高め体を温めるものであり、そこで猿のように敏捷に行動する「傀儡番」は、明らかに異質の空間に住む異質の人間とされている。それゆえに、殺人行為すらも「任俠」の論理による一種の合理化が図られており、吟の中には作者の、被害者側に立った怨言も罵倒もない。そこに存在するのは自由奔放な「傀儡番」の姿であって、吟の作者と「傀儡番」とは互いに無関係なものとして切断されている。どこか他人事のような殺人行為描写はこの「臺灣吟」以外にも、「眾中ニ向ヒ依長ナルヲ誇ラント要スルニ、只ダ論ズルノミ誰カ最モ殺人スルコト多カラント<sup>92</sup>」「博ク頭顱ヲ得テ戸ニ當テ列ヌ、髑髏多キ處是レ豪門ナリ<sup>93</sup>」など枚挙に暇が無い<sup>94</sup>。ロビネットと同時代の同治初年の成立と言われる『臺灣府輿圖纂要』にも、「再ビ入レバ則チ崇爻、傀儡ノ諸番ナリ。番性殺ヲ嗜メバ、敢テ其ノ境ニ入ル人無シ<sup>95</sup>」とある。ここでもやはり作者と「傀儡番」との「距離」がつかめず、所謂「番害」に苦しむ語気を感じることもない。「傀儡番」記述における書き手自身と「傀儡番」との無関係性とそれに起因する空想性は顕著である。

それでは「傀儡番」のイメージは「カリス」のそれいかに接続しうるのであろうか。ロビネットはすでに引用したように、「先住民」や「食人種」にはそれぞれ「占領」や「占拠」の語を充てた一方、「中国人」に「居住」の語を充てるのと同様に、「カリス」に対して「居住」なる語を充てた。「カリス」へのロビネットの眼差しは温かい。

ロビネットはこの「カリス」につき、「カリスは先住民と中国人、ジャワ人、マニラ人との混血種である。<sup>96</sup>」と述べる。現地訪問の経験が無いロビネットの設定する「カリス」とは、台湾のみならず、中国大陸やフィリピン諸島、果てはジャワ島までも視野に入れた広域にわたる混

血のエスニックグループである。これは18世紀人種学において、オランウータンと人類との過渡的地点として南台湾に有尾人が空想されたことに重なる発想であるといえる。つまり「傀儡」という清代知識人が用意した箱に、18世紀人類学の文脈を注ぎこんだのが「カリス」なのである。両者の実際的な関係は薄く、空想性が強いということだけが共通している。

この「カリス」概念は、後に初代駐台湾府イギリス領事となるスウィンホーによって洗練されていく。スウィンホーは1864年に「カリーズ (Kalees)」の集落を実際に訪問する。この「カリーズ」は「カリス」を指しているわけだが、「カリーズ」の家屋を見学した際にスウィンホーは、以下のように述べている。

体格においては、この近くのカリー (Kalee) は非常に多様であった。背が高くがっしりした者もいれば、背が低く横に広い体をしている者もいた。肌の色にしても、黄褐色で、最も色の薄い<sup>Chinese</sup>中国人人夫と大体同じ者もいれば、完全に深褐色をしている者もいた。彼らの顔形もまた一様ではなかった。大きな頭と広い顎を持つマレー人のような者もいれば、モンゴル人の類型に近い者もいた。<sup>97</sup>

スウィンホーのこの描写は自ら実際に視察しただけあって、ロビネットや清朝知識人と比べると、描写内容の写実性は増している。ただ、「彼らには中国文明の明らかな兆候が存在していた<sup>98</sup>」と、文化面における中国への親近性を指摘するものの、スウィンホーの関心の重点がやはり人種学的な識別にあったことは、スウィンホーの記述の大部分が上記のように人種類型に基づく内容であったことから理解できる。ヨーロッパの民族議論に伝統的に存在してきた人種学的関心はスウィンホーにおいても顕著である。そしてここで重要なのは、スウィンホーの記述内容の是非ではなく、ロビネットが設定した、人種を跨いだ混血的性格を持つエスニックグループとしての「カリーズ」想像をスウィンホーが踏襲していることである。別のエスニックグループの存在の可能性については最初から議論の埒外にあり、人種の連続性というグラディエーションの途中に「カリーズ」という一つのエスニックグループが立ち上げられようとしている。「傀儡番」は人種主義的観点から解釈されたのである。そしてその一方で、「混血性」のロジックを堅持することで、東南アジアと台湾中北部とを結ぶ過渡的地域としての恒春半島のイメージは守られたわけである。過渡的地域ゆえの「混血性」の言説は、他のスウィンホーの文章にも見られる。

<sup>The wild Kalee women</sup>未開のカリー女性は生来美しく、島の東側の<sup>Chinese</sup>中国人によって、妻になるよう求められている。……こうした通婚の結果として、カリーの容貌や類型が、フォルモサ全体にわたって、普通の中国人人口の間で広まっているように見える。……男性のカリーたちの間の多くの顔つきは、著者〔スウィンホー〕にルソンの<sup>Tagals</sup>タガル人を思い出させる。……カリー族が<sup>the Kalee tribe</sup>タガルの起源を持つ<sup>Tagal origin</sup>ということを疑う余地はほとんど無い。<sup>99</sup>

一つ前の引用で「非常に多様」とされた外見の特徴が、この引用ではタガルを想起させると一本

化されており、スウィンホーの論理は若干の矛盾を抱えている。しかし、二つの引用において共通しているのは、「カリーズ」とはフィリピン以南の人種と中国人との過渡的地帯における一つのエスニックグループを指すということである。スウィンホーの「カリーズ」解釈は、あくまでも、それを「連続性」言説に乗せることだけは前提となっているのである。

### (3) 「南東」への眼差しと「インディアン」について

次にロビネットによって「若干の食人種<sup>cannibals</sup>」が存在するとされた「南東端」の問題について考えたい。ラーペント号事件当時、ナイブラザーズ商会 (Messrs. Nye Brothers & co.) のギデオ  
ン＝ナイ (Gideon Nye) は、上述のケルピー号に兄弟が乗ったまま行方不明となっていたこともあって、台湾近海における海難事故の問題に大変強い関心を寄せていた。そして、ラーペント号事件発覚以降、ナイはアジア艦隊司令長官アムストロングを始め、黒船で知られるベリーや、あるいは弁務官パーカーらに対策を講じるよう積極的に働きかけていく。その際、「問題の本当の核心、すなわち島の南東部<sup>the southeastern part</sup>」の扱いをめぐり、ナイは1857年2月10日付パーカー宛書簡で以下のように言及した。

島の南東部<sup>the southeastern part</sup>は、非常に獐猛な混血の人種<sup>a mongrel race</sup>の領域であり、その混血人種と、島の西側にのみ住む中国人<sup>Chinese</sup>との間には、不断の敵対関係が存在する。<sup>100</sup>

ナイはここでは、「混血」が具体的にいかなる民族間の「混血」であるのか明記しておらず、この点において「カリス」の例とは明らかに異なる。「mongrel」という単語は、「純粋でないもの」「雑種」を意図する語であって、人間に用いれば蔑視の語気を含む。つまり「カリス」に用いられた「a mixed race」とは語気が異なるのである。「食人種」という語を用いたロビネットと同様の、獐猛野蛮な「南東部」のイメージがこの引用には存在する。だがナイは、当時ロビネットと交流があったものの<sup>101</sup>、「南東部」を自ら訪問したことはなかった。したがってナイの「南東部」への激しい嫌悪感はロビネットとの付き合いの中で培われたものであり、ロビネットの「南東端」とナイの「南東部」とは、その意図するものとしては同一のものを指しているのは間違いない。ナイは上記のパーカー宛書簡において、これまでの調査から分かったこととしてまず3点を挙げてから、「南東部」の領有を以下のように建議する。

第一に、こうした海難事故においては、中国人<sup>Chinese</sup>が決して支配権<sup>jurisdiction</sup>を行使したことがないその部分〔南東部〕の海岸の居住者<sup>residents</sup>をアムストロング提督が懲罰すればそれでよいということである。第二に、これらの居住者<sup>residents</sup>や定住者<sup>inhabitants</sup>は単に冷酷<sup>cruel</sup>かつ血に飢えた野蛮人<sup>bloodthirsty savages</sup>であって、彼らが慈悲にほとんど意を払わないのは、彼らが(完全に野蛮な無知ゆえに)文明的政府<sup>civilized governments</sup>の権力にほとんど意を払わないのと同様だということである。第三に、それゆえに、そうすることの正当性を本人たちに完全に通知した後、彼らのうち提督が接近可能な者を見せしめとして提督が罰するのは、人道と文明に対する義務であるということである。もしも提督が、人道



と商業のために島のその部分を所有してこれを支配するのであれば、私は喜ぶであろう。それはこれまでその支配に服してこなかった唯一の地域であるという点で中国のためになるというばかりでなく、この地区と交流関係を持つ他のあらゆる国家のためにもなるのである。<sup>102</sup>

ナイの文章は「南東部」の領有に非常に熱心であるが、ここで注意せねばならないのは、（繰り返しになるが）ナイは現地を訪問したことがないということである。ナイの「南東部」想像はロビネットと同様に非常に空想的であって、自らの言う「南東部」がどこを指すのかも分からないままである。にもかかわらず、ナイの書簡を受け取ったパーカーは、ナイの書簡に動かされたかのように、2月12日にワシントンの國務長官宛に以下の内容の書簡を送る。

我々は、多くのヨーロッパ人、なかでもわが国の友人と国民が、野蛮人の邪悪な残酷さの犠牲になってきたと信ずるに足る証拠を一つ一つ持っている。合衆国政府は、台湾、とりわけ野蛮人が現在住まう台湾の南東部に関連して、人間性、文明、航海、商業の利益のために求められる行動から尻込みしないであろうということを大いに期待されるべきである。<sup>103</sup>

「南東部」の「野蛮人」の「邪悪な残酷さの犠牲」をヨーロッパ人が受けてきたという記述内容は、ロビネット、そしてナイへと続く「南東端／部」のイメージをここでも受け継いでいることを表している。「南東部」の先住民は、「中国人」とも「欧米人」とも敵対する孤立した野蛮人という記号を常に背負わされていた。したがってパーカーは文明のために、南東部に対する「行動から尻込みしない」よう國務長官に呼びかけたわけである。

「南東」の言説はその後も、恒春半島周辺で漂着民殺害事件が発生する度に想起されていく。1867年ローバー号事件の際、アメリカのアジア艦隊司令長官ベルは、報復及び生存者救助のために現地南湾で行った上陸作戦の報告のなかで、遠征目的とは元来、「島の南端に向かい、島の南東端つまり南東の岬に居住している野蛮人の一味が徘徊する場所を可能であれば破壊するため<sup>104</sup>」であったと述べている。ベルによって「南東端／部」は初めて現地調査されたことになる。このときの「南東端」とは南湾東岸である。「南」に対するスウィンホーの記述と同様に、現場を見たベルの「南東端」記述も、それまでと比較して写実性が格段に強まることとなった。ベルは上陸兵に向かい発砲する先住民を以下のように描写する。

我々が丘陵に向かい進軍したとき、細道を知っている野蛮人どもは大胆にも我々と戦うことを決意した。彼らは、丈の長い草地を縦横に、そして隠れ場所をあちこち密かに移動しては、我々が北アメリカのインディアンに匹敵する戦略と勇敢さを示した。<sup>105</sup>

ベルは先住民の「好戦性」を「獐猛」とは評価せずに「勇敢」であると解釈を変更し、「これまでなされてきた記述ほど、人間の満足に対して野蛮でもなければ無知でもない<sup>106</sup>」と評価した。「人食い人種」としての「南東部」想像は修正を加えられたのである。ただ、ここで一つ注意が

必要なのは、こうした解釈の変更自体が、18世紀以降のヨーロッパの典型的な眼差しにおける台湾記述を雛壇にしているということである。ドマイヤの著作にある以下の記述を確認してみたい。

フォルモサ島全体が中国人の支配のもとにあるというわけではない。フォルモサ島は山脈によって東西二つの部分に分かれている。……東部は、中国人によれば、野蛮人のみが住んでいるとのことである。その国土は山がちで、農耕が行われておらず、そして未開である。中国人が野蛮人に与える特徴は、アメリカの野蛮人について言われていることと大差無い。中国人は野蛮人をイロコイ族ほど未開ではないように描写する。……<sup>107</sup>

ベルはドマイヤの時代にすでに存在していた「台湾先住民＝アメリカンディアン」のイメージをして、「野蛮」「獐猛」のイメージに取って代わらせることによって、現実はそのままだに「南東部」のイメージについては刷新しようとしていた。

実際のところ、スウィンホーもまた1858年に瑯嶠湾（今の車城湾）より恒春半島南端西部の恒春縦谷平原に上陸している。スウィンホーが訪れた地点はベルが上陸作戦を行った南湾からは目と鼻の距離にある車城と社寮（今の車城郷射寮）であった。しかし、スウィンホーが当時重視したものとはやはり、「現地の住民は大半が混血種であり、多くの婦女は純粋な先住民である。<sup>108</sup>」「彼女たちの肌の色は一般の漢人と比べ、褐色が大変深い。<sup>109</sup>」という人種論であった。

無論スウィンホーが見たものとベルが見たもの間には異同があったであろうが、二人の記述内容は、南湾東岸と恒春縦谷平原という大変な距離の近さから考えれば余りにも異なっているといわざるを得ない。この相違は、無論空間の相違という要素も無いわけではないが、それ以上に、「存在の連鎖」の中で「南部」を見出だそうとしたスウィンホーの眼差しと、「インディアン」の観点から「南東部」を見出そうとしたベルの眼差しの差による部分がある。言うなれば、スウィンホーは「南部」を欲し、ベルは「南東部」を欲したに過ぎない。あらかじめ設定されてあるそれぞれの対象のイメージによって実はすでに解釈されていることに無自覚なまま、対象は解釈され記述されたのである。

## おわりに

最後にルジャンドルについて考えてみよう。ルジャンドルは所謂「蕃地無主論」を展開した『フォルモサ先住民地区は中華帝国の一部分なるや (Is Aboriginal Formosa a Part of the Chinese Empire?)』<sup>110</sup>のなかで、ドマイヤやデュアルド、スウィンホーを非常に多く引用している。ルジャンドルの南台湾認識が、本論で論じてきたような西洋の知の文脈の影響を受けていたのは間違いない。そしてルジャンドルが恒春半島先住民を議論する際には、頻繁に登場する話題が二点ある。それがまさに、「混血 (Half Caste)」と「インディアン」なのである。

「混血」について例を挙げると、1867年ローバー号事件の際ルジャンドルは、恒春半島南端先住民の有力者であったトーキトクとの間で和約の協定（「南岬之盟」）を結ぶが、締結に際しル

ジャンドルへの保証人となったのが、現地の「福建人及び広東人の諸村落の諸代表」と「混血者の代表」であった<sup>111</sup>。「混血者」というカテゴリーが、「福建人」「広東人」と独立同等の位置を占めるエスニックなカテゴリーとして定位されたのである。かかる定位に読み取るべきは、まさに既に論じてきた「南部」イメージの影響の強さであろう。

また、それは「インディアン」にしても同様である。ルジャンドルは在台湾の清朝当局に恒春半島住民に対する支配強化を1867年に要求したとき、「フォルモサの野蛮人は、いまだに合衆国の大部分の地域に居住するインディアンthe Indiansと同様の立場にいる」と評した上で「我が国を見習うべきである」とした。だがその一方で<sup>112</sup>、後に明治政府の御雇外国人として、『フォルモサ先住民地区は中華帝国の一部分なるや』を1874年に書いたときには、「フォルモサ先住民地区に対する中国の所有権をインディアンの荒野に対する合衆国の所有権と同等のものを見なすことはできない<sup>113</sup>」と述べて所謂「蕃地無主論」を展開してみせた。主張の内容如何を問わず両者に共通しているのは、「インディアン」の概念を用いて恒春半島の先住民を見ようとする意志である。

「インディアン」の文脈は当然のこととして、「南東」のイメージを想起させる。ルジャンドルは1872年に日本軍台湾派兵の手順につき覚書を3点提出しているが、そのうち、同年11月15日に提出した「第二覚書」のなかに以下のようにくだりがある。

清國政府從來臺灣島ノ南東ノ部ヲ整治スル能ワス又其權ヲ布張シテ政令ヲ暢達シ事務ヲ理スルコト能ワス此等ノコト現ニ其實跡ニ因テ知ラレシ處ナリ同島南東部ノ海ハ現今各國ノ船舶往來絶ヘス故ニ恐ラクハ早晚必ラス各國ノ人來ツテ此地ノ事務ヲ執ルヘシ西國人ノ此地ニ據有シテ事ヲ執ルハ我カ日本ノ妨ケナリ<sup>114</sup>

これは台湾島割譲を清朝政府に主張する際の根拠としてルジャンドルが記したものである。ここでいう「南東」もやはり、具体的にどこを指しているのかが、これまでに引用してきた「南東端／部」記述と同様にさっぱり分からない。攻撃対象として構想していた山地先住民が念頭にあるものと思われるが、字面としては「南東」「生蕃」の文字があるだけで、詳細なことは分からない。しかし分からないのがある意味必然であるということこそ、本論文全体を通して指摘したことである。

以上、西洋の文脈における南台湾への眼差しの展開過程につき論じてきた。認識枠組みとして西洋人がまず遠巻きに参照したのはいつも漢籍資料であったが、それは従来の知の文脈における南台湾想像／空想になじむよう再編集の後に導入された。したがって、「混血」の過渡的地帯としての「南部」想像は、かかる想像の空想性を徐々に減じつつも、一貫して維持された。

19世紀には、従来の「南部」想像が準備していなかった海難事故が恒春半島付近で多発するが、その「衝撃」は、新たに準備された「南東」概念が緩衝材となり、獐猛野蛮のイメージを引き受けることで、「南部」の好意的なイメージを守る役割を果たした。そして、南北に長い台湾島の地形を考えれば容易に想像しうるものとして、この「南」と「南東」は地理上の概念というよりは、話し手のイメージを投影する際の記号として機能している側面が強かった。そのイメー

ジとは本源的には「存在の連鎖」というメタレベルでの思考形式がもたらすイメージであった。そしてそのために、恒春半島の「混血」言説は欠くべからざるものとなったのである。換言すれば、「存在の連鎖」を担保するための「南」のためのスケープゴートとしての「南東」である。こうした空間布置こそ「恒春半島」という視座が持つ特殊性であり、筆者としてはそこに新しい台湾史研究への入り方があるように思う。

## 注

- 1 ロバート＝エスキルドセン「明治七年台湾出兵の植民地的側面」、明治維新史学会編『明治維新とアジア』、吉川弘文館（東京）、2001年。
- 2 松永正義「台湾領有論の系譜——一八七四（明治七）年の台湾出兵を中心に」、『台湾近現代史研究』第1号、1978年。
- 3 羽根次郎「關於牡丹社事件之前 Boutan（牡丹）的含意」、若林正丈・松永正義・薛化元主編『跨域青年學者臺灣史研究論集』、稻鄉出版社（臺北縣板橋市）、2008年。
- 4 M. l'Abbé Grosier, *Description Générale de la Chine, ou Tableau de l'État Actuel de Cet Empire*, Paris: Moutard, & de Madame Comtesse d'Artois, Tome Premier, 1785.
- 5 *Lettres Edifiantes et Curieuses, Ecrites des Missions Etrangères, par Quelques Missionnaires de la Compagnie de Jesus*, XIV. Recueil, Paris, Nicolas le Clerc, 1720.
- 6 *Ibid.*, p.19.
- 7 沙馬磯頭が恒春半島南端にある鵝鑾尾と貓鼻頭の二つの岬のうちいずれを指すのかについて、『恆春縣志』（1895）は前者を、伊能嘉矩や安倍明義は後者を主張しており、定かではない。（屠繼善『恆春縣志』、臺灣銀行經濟研究室（臺北）、1960年、p.253。安倍明義『臺灣地名研究』、蕃語研究會（臺北）、1938年、p.280。）
- 8 *Lettres Edifiantes et Curieuses*, pp.19-20.
- 9 *Ibid.*, p.39.
- 10 *Ibid.*, pp.48-49.
- 11 *Ibid.*, p.39.
- 12 *Ibid.*, p.39.
- 13 *Ibid.*, p.40.
- 14 *Ibid.*, p.41.
- 15 *Memoires pour l'Histoire, des Sciences et des Beaux Arts*, De L'Imprimerie de S.A.S. à Trevoux, & se vendent à Lyon, Chez les Freres Bruyset, Fév 1721, pp.255-256.
- 16 J. B. Du Halde, *Description Géographique, Historique, Chronologique, Politique, et Phisique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise*, Tome Premier, Henri Scheurleer: La Haye, 1736, pp.180-181 and 183.
- 17 *Histoire Générale des Voyages*, ou Nouvelle Collection de Toutes les Relations de Voyages par Mer et par Terre, Tome sixième, Paris: Didot, 1748. pp.57 et 59.
- 18 Du Halde, *The General History of China*, the Third Edition, Volume the First, London: printed for J. Watts, 1741, pp.176-177 and 179-180.
- 19 「……有山朝山（在雞籠鼻頭山東南、有土番山朝社、其南即蛤仔灘三十六社）」（卷之二、第六頁右葉）
- 20 「……有山朝山（在雞籠鼻頭山東南、有土番山朝社、其南即蛤仔灘三十六社）」（卷之一、第二十一頁左葉）
- 21 「蛤仔灘（音葛雅蘭）等三十六社、雖非野番、不輸貢賦、難於悉載。」（第11頁）
- 22 簡炯仁「『鳳山八社』平埔族大舉遷移潮州斷層」、同『屏東平原平埔族之研究』、稻香出版社（臺北縣板橋市）、2006年。
- 23 「米秣（鳳山八社土民種于園、米獨大）」（卷之四、第一頁左葉）
- 24 「鳳山之下淡水等八社、不捕禽獸、專以耕種爲務、計丁輸米於官。」（卷之五、第五頁右葉）
- 25 「偽時征鳳山縣屬下淡水等八社土番男婦丁口米共計五千九百三十三石八門。」（卷之七、第六頁左葉）
- 26 「如諸羅三十四社土番捕鹿爲生、鳳山八社土番種地餽口、偽鄭令捕鹿各社以有力者經管、名曰贖社。……其鳳邑八社丁米、教冊壯少諸番、似宜一例通行征米一石。」（卷五、第七十四頁左葉）

- 27 「禾稂（鳳山八社土民種于園、米獨大）」（巻七、第十九頁左葉）
- 28 「鳳山縣居其南、自臺灣縣分界而南、至沙馬磯大海、袤四百九十五里；自海岸而東、至山下打狗仔港、廣五十裏。攝土番十一社、曰：上淡水、下淡水、力力、茄藤、放索、大澤磯、啞猴、答樓、以上平地八社、輸賦應徭；曰：茄洛堂、浪崎、卑馬南、三社在山中、惟輸賦、不應徭；另有傀儡番並山中野番、皆無社名。」（第11頁）
- 29 「地多竹、大數拱、長十丈。伐竹構屋、茨以茅、廣長數雉。」（第25頁）
- 30 「器有床、無几案、席地坐。」（第26頁）なお、「案」は「方形の足付き机」の意、「席す」は「敷物を敷く」の意。
- 31 「南番尤窮於北番、……。」（巻之五、第五頁、右葉）
- 32 「飯以糯米爲之、熟則各以手捏團而食、……。」（巻之五、第五頁、左葉）なお、「捏團」は「手でこねて丸める」の意。
- 33 「所用標槍、長五尺許、取物于百步之内、發無不中。」（巻之五、第六頁、右葉）
- 34 「竹木之類、隨手砍斷、捷于工匠、編籬造屋、俄頃可成。」（巻之五、第六頁、右葉）なお、「俄頃」は「にわか」の意。
- 35 「再入深山中、人狀如猿猴、長不滿三尺、見人則升樹杪。」（巻七、第六頁左葉）なお、「樹杪」は「こずえ」の意。
- 36 「室中空無所有、視有幾犬。」（p.35）
- 37 「山中多麋鹿、射得輒飲其血；肉之生熟不甚較、果腹而已。」（p.35）なお、「麋鹿」は鹿の一種で所謂「四不像」のこと。
- 38 Glanus, *Les Voyages de Jean Struys, en Moscovie, en Tartarie, en Perse, aux Indes, & en Plusieurs autres Païs Étrangers*, Amstredam, la Veuve de Jacob van Meurs, 1681.
- 39 *Les Voyages de Jean Struys, en Moscovie, en Tartarie, en Perse, aux Indes, & en Plusieurs autres Païs Étrangers*, Tome Premier, Lyon: C. Rey & L. Plaignard, 1682
- 40 Glanus, *Les Voyages de Jean Struys, en Moscovie, en Tartarie, en Perse, aux Indes, & en Plusieurs autres Païs Étrangers*, Tome Premier, Amstredam: Aux dépens de la Compagnie, 1720.
- 41 Geanius, *Les Voyages de Jean Struys, en Moscovie, en Tartarie, en Perse, aux Indes, & en Plusieurs autres Païs Étrangers*, Amstredam: Jean Sincere, rue Véritable, au Miro, 1730.
- 42 Glanus, *Les Voyages de Jean Struys, en Moscovie, en Tartarie, en Perse, aux Indes, & en Plusieurs autres Païs Étrangers*, Amstredam, la Veuve de Jacob van Meurs, 1681, p.53.
- 43 Abbé Grosier, *L'isle Tai-ouan ou Formosa*, Joseph Anne Marie de Moyriac de Mailla, *Histoire Générale de la Chine*, Tome Treizieme et Dernier, 1785, p.172.
- 44 M. Baudelot de Dairval, *Des Voyages, et de l'Avantage que la recherche des Antiquitez procure aux Sçavans*, Nouvelle Edition, Tome Premier, Rouen: Charles Ferrand & Ganteria, 1727, pp.114-115.
- 45 異種異型の人間が存在する怪人伝承が近代以降も継続した原因として、古代より根強いキリスト教的世界観との関係が挙げられる。以下論文を参照。松本一喜「帝国の隠喩的世界——近代初期ヨーロッパにおける野蛮の継承——」、『言語と文化』第10号、愛知大学語学教育研究室（愛知県豊橋市）、2004年1月。
- 46 Daubenton & De Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du roy*, Tome Troisième, Paris: l'Imprimerie royale 1749, pp.402-403.
- 47 J. B. Robinet, *Considérations Philosophiques de la Gradation Naturelle des Formes de l'Être ou les Essais de la Nature qui Apprend à Faire l'Homme*, Paris, Charles Saillant, 1768.
- 48 *Ibid.* p.161. なお、十四種の人種は以下の順に従って列挙されている。①有尾人、②黒人、③（アフリカ西南部）ホッテントット、④その他カフィール、⑤ヨーロッパのラップ人、アジアのサモエド人、アメリカ州デービス海峡の野蛮人、⑥顔と体が毛むくじゅらの野蛮人、⑦オスチャーク人、⑧タタール人、⑨中国人、日本人ほか、⑩インド人、大きな脚を持った人間、⑪ペルシア人、アラブ人、エジプト人、モリア人、⑫スペイン人、ポルトガル人、フランス人、イギリス人、オランダ人、ドイツ人、スウェーデン人、ポーランド人、デンマーク人、⑬イタリア人、トルコ人、ギリシア人、キルギス人、グルジア人⑭パタゴニア人、すなわち巨人。
- 49 *Ibid.* p.161.
- 50 山田仁子はアリストテレスにとってのこうした自然界の連続性を、①境界が明確でない連続性と②直線的に並ぶ連続性の二点に整理し、この二点に、連続性を重視する「存在の連鎖」概念の源泉を見ている。

詳しくは以下の論文が参考になる。山田仁子「『存在の連鎖』に見るアナロジーの展開」、『言語文化研究』(徳島大学)第9号、2002年2月。

- 51 アリストテレス (島崎三郎訳)「動物誌」第8巻第1章、『アリストテレス全集 8』、岩波書店、1969年。
- 52 ルソー (小林善彦訳)「人間不平等起源論」、平岡昇編『世界の名著30 ルソー』、中央公論社、1966年、p.204。
- 53 川上恵江「ヨーロッパ思想史における動物観の変遷」、『文学部論叢(歴史学篇)』(熊本大学)第89号、2006年3月。なお、人間と動物を連続的に考える観点は、ロビネ『人間の形態の性質における漸次的変化に関する哲学的考察、あるいは人間を作る自然界に関するエッセイ』の「有尾人」の項目の冒頭にある「A la vue de l'Orang-outang on est tenté de demander, que lui manque-t-il pour être un homme? (オランウータンを見るときに我々が問わざるを得ないのは、人間になるためにはそのオランウータンに何が足りなかったのか、ということである。)」という問題提起からも、そのニュアンスを感じ取ることができる。
- 54 James Burnett Monboddo, *Of the Origin and Progress of Language*, Vol. I, Second Edition, Edinburgh: printed for J. Balfour and T. Cadell, London, 1774, p.262-267.
- 55 Capt. George Shelvocke, *A Voyage round the World by the Way of the Great South Sea*, London, 1726, pp.438-439. なお、本書の初版は1723年であるが未見。
- 56 Anson, *A Voyage to the South Seas, and to Many Other Parts of the World, Performed from September 1740, to June 1744*, London: R. Walker, 1745.
- 57 *The Scots Magazine*, Vol. XI, Edinburgh: printed by W. Sands, A Murray and J. Cochran, 1749, pp.275-276.
- 58 *A new collection of voyages, discoveries and travels*, Vol. III, London: printed for J. Knox, 1767, p.473 and 478.
- 59 Anson, *Op. Cit.*, p.303.
- 60 Augustus Count de Benyowsky, *Memoirs and Travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky*, translated from the original manuscript, in two volumes, London: printed for G. G. J. and J. Robinson, 1790.
- 61 許明龍『歐洲十八世紀“中國熱”』、山西教育出版社(太原)、1999年、p.117。
- 62 Joseph-Anne-Marie de Moyriac de Mailla, *Histoire Générale de la Chine, ou Annales de Cet Empire, Traduites du Texte Chinois*, Tome Treizieme et Dernier, Volume de Supplément, rédigé par l'Abbé Grosier, Paris: Moutard, & d'Artois, 1785.
- 63 M. l'Abbé Grosier, *Description Générale de la Chine, ou Tableau de l'État Actuel de Cet Empire*, Paris: Moutard, & de Madame Comtesse d'Artois, Tome Premier, 1785, pp.168-169.
- 64 Abbé Grosier, *A General Description of China*, Vol. I, London, printed for G. G. J. and J. Robinson, 1788.
- 65 Abbé Grosier, *A General Description of China*, Vol. I, Philadelphia, printed by Dunning and Hyer, for Robertson and Palmer, 1795.
- 66 Joseph-Anne-Marie de Moyriac de Mailla, *Storia generale della Cina: ovvero Grandi Annali Cinesi; Tradotti dal Tong-Kien-Kang-Mou*, Siena: F. Rossi, Stamp. del. pubb., 1777.
- 67 *Encyclopædia Britannica; or a Dictionary of Arts, Sciences, and Miscellaneous Literature*, Third Edition, Vol. VII, Edinburgh: printed for A. Bell and C. Macfarquhar, 1796, pp.351-354.
- 68 Julius Klaproth, *Mémoires relatifs à l'Asie: Contenant des Recherches Historiques, Géographiques et Philologiques sur les Peuples de l'Orient*, Tome Premier, Paris: Dondey-Dupré père et fils, 1824.
- 69 *Ibid.* p.352.
- 70 たとえば、*Ibid.* p.28。
- 71 *Ibid.* pp.414-421.
- 72 Julius Klaproth “Description de L'Ile de Formose, Extraite de Livres Chinois”, *Mémoires Relatifs à l'Asie: Contenant des Recherches Historiques, Géographiques et Philologiques sur les Peuples de l'Orient*, Tome Premier, Paris: Dondey-Dupré père et fils, 1824, pp.321-374.
- 73 *A Concise Account of the Island of Formosa*, interpreted from M. Klaproth's Extracts of Chinese Authorities, *The Asiatic Journal and Monthly Register for British India and Its Dependency*, Vol. XVIII, Jul to Dec 1824, pp.575-580.
- 74 Une [sic] Société de Géographes, *Dictionnaire géographique universel: contenant la description de tous les lieux du globe intéressans sous le rapport de la géographie physique et politique, de l'histoire, de la statistique, du commerce, de l'industrie, etc.*, Tome Sixième, Paris: A. J. Killan, Ch. Picquet, etc., 1829, p.24.
- 75 「治之東、其山之最聳者、曰傀儡山……、曰卑南覓山……。轉而南、復折而西南、迭巒複岫、莫非山也。

- ……更轉而西出於海、爲郎嬌山（在沙馬磯頭山東南、離府治五百三十餘里）、爲沙馬磯頭山（在郎嬌山西北。其山西臨於海、山頂常帶雲、人視之、若有人形往來雲中、疑爲仙人降游其上。離府治五百三十里）、而山始盡、皆鳳山之佐輔也。」（蔣毓英『臺灣府志』（卷一封域志、山川、鳳山縣山）、第五頁右頁。）なお、「迭巒複岫」は「巒（みね）を迭（かさ）ね岫（いはあな）を複（かさ）ぬ」の意。
- 76 「自沙馬磯頭、一潮水可至、遠視微茫、舟人罕至、土番所居、地宜羊、去下淡水三百餘里、多瘴氣。」（『大清一統志』（卷之二百七十一、臺灣府）、山川、1744（乾隆九）年。）
- 77 「自鳳山溪南至於淡水等處、早則東風大作、及晡鬱蒸、入夜寒涼。冬少朔風、不用裝綿。土多瘴氣、來往之人恆以疾病爲憂。」（陳文達『鳳山縣志』（卷之七、風土志、氣候）、1720（乾隆五十九）年。なお、本論文では、台湾銀行經濟研究室版（臺北、1961年）、p.85.より引用。）なお「淡水等處」は「下淡水溪周辺」の意、「鬱蒸」は「蒸し暑い」の意、「朔風」は「北風」の意、「裝す」は「中に入れ込む」の意。
- 78 岡崎勝世「リンネの人間論——ホモ・サピエンスと穴居人（ホモ・トログロデュテス）——」、『埼玉大学紀要（教育学部）』第41巻第2号、2006年3月。
- 79 François Bouvier, *Le Panthéisme, ou l'origine de toutes les religions*, Mons: Hoyois Derely, 1830.
- 80 *The Chinese Repository*, Vol. I, No. 1, Canton, May 1832.
- 81 Edwin Stevens, *Formosa*, *The Chinese Repository*, Vol. II, No. 9, Canton, Jan 1834.
- 82 Remarks on Formosa, respecting the rebellion of Choo Yihkwei, with suggestions for quelling insurrections, and for the improvement of the island, *The Chinese Repository*, Vol. VI, No. 9, Canton, Jan 1838.
- 83 *The Chinese Repository*, Vol. XX, No. 5, Canton, May 1851.
- 84 ただし、漂着者が強奪された上で殺される、というのは単なる故意の残虐行為と考えることはできない。東アジア海域では、海岸に漂着した物品に対して、現地民あるいは現地権力に「遭難物占取」の慣行が長らく存在しており、時にそれは人命をも含めた「占取」の慣行であった。やがて、国際関係の整備に伴い、漂流民送還体制が出来上がっていくわけであるが、清朝国家権力の浸透が弱かった地域では、こうした慣行は未だ継続していた。なお、以下の研究を参照。金指正三『近世海難救助制度の研究』、吉川弘文館、東京、1968年。荒野泰典『近世日本と東アジア』、東京大学出版会、東京、1988年、第118-120頁。春名徹「漂流民送還制度の形成について」、『海事史研究』第52号、日本海事史学会（東京）、1995年7月。渡辺美季「清代中国における漂着民の処置と琉球」（1）・（2）、『南島史学』第54号・第55号、南島史学会、東京、1999年11月・2000年9月。
- 85 James W. Davidson, *The Island of Formosa, Past and Present*, *Yokohama, Japan Gazette*, Jan. 1903, p.112.
- 86 *Ibid.* p.113.
- 87 *Ibid.* p.113.
- 88 *Ibid.* p.111.
- 89 George Williams Carrington, *Foreigners in Formosa 1841-1874*, San Francisco: Chinese Materials Center, Inc., 1978, pp.133-176.
- 90 W. M. Robinet to Peter Parker, Hongkong, Mar. 2, 1857, *The Executive Documents, Printed by Order of the United States, Second Edition, Thirty-Fifth Congress, 1858-1859, and Special Session of the Senate of 1859, Washington: William A. Harris, 1859*（以下、「EDS 35」とする）、pp.1211-1215.
- 91 「山深深處又深山 一種名爲傀儡番 負險殺人誇任俠 終年煨芋飽兒孫 烟霞鑄骨身能壽 薜荔爲衣冬亦溫 鳥道倚天高不極 慣常奔走捷如猿」（高拱乾『臺灣府志』、卷之十第百十五頁自右葉至左葉）
- 92 「傀儡番居傀儡深 豈知堯舜在當今 含哺鼓腹松篁下 盛治無由裕野心 巢穴處處傍巖阿 薜荔爲衣帶女蘿 要向眾中誇俠長 只論誰最殺人多」（卷之十第百二十一頁左葉）
- 93 「深山負險聚遊魂 一種名爲傀儡番 博得頭顱當戶列 髑髏多處是豪門」（郁永河「土番竹枝詞」、同『臺海使槎錄』、臺灣銀行經濟研究室（臺北）、1957年、第175頁。）
- 94 『臺海使槎錄』においても、殺人描写における書き手と「傀儡番」との間の「距離」の問題は以下にあるように淡々とした筆致で書かれている。「酒酣〔たけなは〕トナレバ、各〔おのおの〕豪勇ナルヲ矜〔ほこ〕リ、殺人シテ頭多キ者ヲ以テ雄長ナリト爲ス。故ニ殺人ノ案、歳ゴトニ書ニ絶エズ。（酒酣、各矜豪勇、以殺人頭多者爲雄長；故殺人之案、歳不絶書。）」（『臺海使槎錄』（卷七、番俗六考、南路鳳山傀儡番二）、第154頁。）
- 95 「再入、則崇爻、傀儡諸番。番性嗜殺、無人敢入其境」（『臺灣府輿圖纂要』、成文出版社（臺北）、1983年、第152頁。）
- 96 W. M. Robinet to Peter Parker, Hongkong, Mar. 2, 1857, pp.1211-1215.

- 
- 97 Swinhoe, Robert. "Additional notes on Formosa." *Proceedings of the Royal Geographical Society of London* 10 (1866), p.126.
- 98 *Ibid.*, p.125.
- 99 R. Swinhoe, *Notes on the Aborigines of Formosa*, Notices and Abstracts of Miscellaneous Communications to the Sections, Report of the Thirty-fifth meeting of the British Association for the Advancement of Science, John Murray: London, 1866, pp.129-130.
- 100 Gideon Nye, Jr. to Peter Parker, Macao, Feb. 10, 1857, EDS 35, pp.1203-1205.
- 101 「最近私は、フォルモサのエイプス=ヒル [Ape's Hill: 今の高雄市壽山] や他の拠点において、ロビネット氏や、ウィリアムズ=アンソン商会との商業的事業を行うことに関心を持つに至った」というナイのパーカー宛書簡や、また「ウィリアムズ=アンソン商会やナイブラザーズ商会が私の会社に興味を持つようになってきた」とのロビネットのパーカー宛書簡の内容から、二人に交流関係があったことが理解できる。以下の文献を参照。Gideon Nye, Jr. to Peter Parker, Macao, Feb. 10, EDS 35, p.1204. W. M. Robinet to Peter Parker, Hongkong, Mar. 2, 1857, EDS 35, p. 1213.
- 102 Gideon Nye, Jr. to Dr. Peter Parker, Macao, Feb. 10, 1857, EDS 35, p. 1204.
- 103 Peter Parker to the Secretary of the States of the U.S., Macao, Feb. 12, 1857, EDS 35., p.1184.
- 104 H. H. Bell to Gideon Willes, Shanghai, China, Jun. 19, 1867, *The Executive Documents of the Senate of the United States, Second Session Fortieth Congress* (以下、「EDS 40」とする), p.61.
- 105 H. H. Bell to Gideon Willes, Jun. 19, 1867, EDS 40, p.61.
- 106 *Ibid.*
- 107 *Lettres Edifiantes et Curieuses*, p. 20.
- 108 史温侯「福爾摩莎島訪問記」、p18、原文は、Swinhoe, Robert. "Narrative of a visit to the island of Formosa." *Journal of the North-China Branch of the Royal Asiatic Society* 1, ii (May 1859): 145-164.。
- 109 史温侯「福爾摩莎民族學記事」p36、原文は、Swinhoe, Robert, *Notes on the ethnology Formosa*. London: Frederic Bell, 1863. Extracted from a paper read before the Ethnological Society, and read at the British Association [for the Advancement of Science] in August 1863.。
- 110 Charles W. Le Gendre, *Is Aboriginal Formosa a Part of the Chinese Empire?*, Lane, Crawford & Co., Shanghai, Hong Kong and Yokohama; Hedge & Co., Foochow; Wilson, Nichols & Co., Amoy, 1874.
- 111 U. S. National Archives: Despatches from U. S. Consul in Amoy, Microcopy No. 100, Roll No. 3, The band (a translation from the Chinese), Oct., 1867. なお、「南岬之盟」をめぐる論考としては、羽根次郎「“南岬之盟”和琉球漂流民殺害事件」(若林正文・松永正義・薛化元主編『跨域青年學者台灣史研究續集』、國立政治大學台灣史研究所(臺北)、2009年)がある。
- 112 U. S. National Archives: Despatches from U. S. Consul in Amoy, Microcopy No. 100, Roll No. 3, Charles W. Le Gendre to the General and Taotai of Formosa, Jun 22, 1867.
- 113 Charles W. Le Gendre, *Is Aboriginal Formosa a Part of the Chinese Empire?*, p.2.
- 114 「生蕃處分ニ關スル日本政府意見書覺書」、早稲田大学社会科学研究所『大隈文書』、早稲田大学社会科学研究所、1958年、第26頁。